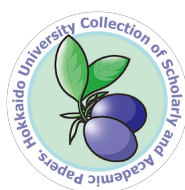




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	教材とティーチング・カルチャー：社会調査教育の例
Author(s)	宇田川, 拓雄
Citation	高等教育ジャーナル, 2, 219-227
Issue Date	1997
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.2.219
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29860
Type	departmental bulletin paper
File Information	2_P219-227.pdf



教材とティーチング・カルチャー

— 社会調査教育の例 —

宇田川 拓雄
北海道教育大学

Teaching Materials and the Teaching Culture

— A Case of Social Research Teaching —

Takuo Utagawa
Hokkaido University of Education

Abstract — Social research is one of the most important ways for sociology to gather empirical and concrete data. It is taught in many universities and colleges. But the quality of the education is, frequently, far from perfect. The professors lack good textbooks and good teaching materials. I have been trying to develop teaching materials for a social research course in recent years. To develop good teaching materials, we must have a shared and established “teaching culture.” The teaching culture is a type of subculture that defines the values and the modes of teaching in higher education. We may not have a common teaching culture now or perhaps our current teaching culture is too old to guide our teaching. In this report, I will argue the importance and necessity of establishing a teaching culture that can answer today’s criticisms of higher education in Japan.

1. はじめに

社会学は内容が多岐にわたり、それに対応して様々な授業科目があるが、ここでは「社会調査」の授業をとりあげる。日本の大抵の大学では、社会学はいわゆる文科系であるにもかかわらず、実験、実技に類する授業を行うという理由で実験講座化されており、一般の文科系科目よりも予算面で優遇されている。優遇をうけるには社会調査の授業を行う必要がある。学問研究の立場から見ると、社会調査は社会事象にかかわるリアルなデータを収集するための重要な研究方法である。現代社会を研究する研究者は、社会調査の方法を取得

しておかねばならない。また、学生の間でも、データの収集、処理、分析の方法を覚えたいという欲求は強く、知識や技術獲得を目的に社会調査の授業を受講する学生は少なくない。

私は1981年に、ただ一人の社会学者として地方国立大学の小さな分校に配属された。身近に研究者集団を待てないような環境では、学界の潮流に乗り遅れないようにしながら、それまで手掛けていたようなスタイルで、高度に抽象的な理論研究を継続することは自分には大変困難だと考えた。そこで、より具体的で、一人でも行えるようなテーマ、すなわちフィールドワークによる社会調査に研究の中心を移すことにし、教育面では、

社会調査実習の授業に力を入れることにした。

最近の研究(田中 平成7)によれば、日本の大学で行われている社会調査実習は、学生指導中心、すなわち、教育に力点を置いた形態のものが半数以上を占めている。しかし私が教職についたころは、社会調査の授業は研究室のプロジェクトとして行なわれることが多く、学生、院生は先生の手足となって働きつつ、徒弟奉公的に調査法を学ぶのが普通であった。私の勤務大学には当時は大学院はなく、学生も小中学校の教員を目指すものばかりであったため、当初から、社会学を専門とするのではない学生に対する「標準的」な社会調査教育を行わねばならなかった。

ここで、「標準的」な教育とは、第一には、「学力・知力に、特に優れているわけでもなく、強烈な問題意識や卓越した社会認識を持っているのではない、平均的な大学生に対する」教育という意味であり、第二には、きちんと専門的な教育を受け、研究を継続している社会学者なら誰でもできる教育という意味である。私自身が学んだような総合大学の社会学部や社会学大学院では、社会学に対して高いポテンシャルとモラルを持った学生を相手に、担当教員独自の教育ないし師弟訓練を行い、専門家養成を行うことを目的としている。私は自分が受けたのとは全く異なる教育環境で、学生に対する教育をスタートした。

2. 授業がうまくできない理由

2.1 コンピュータがない

教員として授業を開始して、たちどころに、授業がうまくいかないことに気づいた。社会調査の授業で、特に手間のかかる、コンピュータによるデータ解析の教育に取り組んだ。最初は、データの統計計算のためのコンピュータやソフトが自由に使えないために授業がうまくいかないのだと考えた。当時はようやく BASIC 言語が動く 16 ビットタイプのパソコンが出回り始めたばかりで、実用に耐える機材はきわめて高価であった。しか

し、年とともに学内のコンピュータ環境が整備され、やがて 40 台の Macintosh、40 台の DOS マシン、80 台の UNIX ワークステーションが導入されるようになった。それぞれ専用の教室に設置され、最終的にはキャンパス内に情報処理センターまでできてしまった。小中学校の教員養成を目的とする 1 学年 350 名程度のキャンパスとしては十分すぎるほどのコンピュータがそろったが、授業はうまくできなかった。

2.2 ソフトウェアがない

次にはコンピュータ言語が難しいせいだと考えた。そこで二次元マトリックスの形をしている社会調査データを処理するのに都合の良い APL 言語の教育を試みた。APL 言語は論理計算を行う優れた処理系なのだが、私の教え方がまずかったせいか、学生はだれも理解できなかった。まして APL 言語と社会調査を結び付けた授業は他の社会学者にも全く受け入れられなかった。

コンピュータや統計ソフトのマニュアルが分かりにくいので、コンピュータメーカーと共同で統計ソフトの使い方をやさしく解説したマニュアルを作成した（日本電気 1991）。マニュアルは第 3 版まで出たが、値段が高くなり過ぎたのと、多変量解析まで含めたため内容が難しすぎて学部の授業には使えなかった。

1989 年に、汎用コンピュータのオンラインマニュアルにヒントを得て、「統計データ解析チューターシステム」というコンピュータソフトウェアの開発を思い立った。これは一種のブラウジングシステムで、パソコンの画面上に学習内容、指示、ヒント、統計プログラムを表示し、学生の学習を援助するように設計した。

色々調べてみると、私のアイデアは、当時話題になり始めた「ハイパーテキスト」と呼ばれる構造を持ったソフトウェアで実現できることが分かった。そこで、Apple 社のパソコン（Macintosh）と HyperCard というアプリケーションを使って、チューターシステムの開発に着手した。この研究

では最終的に「DATS(=Data Analysis Tutor System), データ解析チューターシステム」と名付けたソフトウェアのプロトタイプを作成した(宇田川 平成4)。

DATSを使った授業はきわめてうまくいった。しかし完全なマニュアルや使用説明書などを完成させることができなかったため、私以外の教員には使いこなせるものではなかった。また、社会調査カリキュラムのうち、データ解析の教育のみを目的としたシステムであるために、社会調査の授業は別に行わなければならない、かえって負担が増加した。

2.3 社会調査データ・バンクがない

DATSの弱点の一つは現実の社会調査のデータを余り利用していないことである。DATSには例題を用意したが、それには私自身が収集したデータや、私の同僚や知人の研究者のデータを利用した。DATSはデータ解析を念頭に作ったもので、例題も医学、家政学、心理学、体育学、社会学など様々な分野から選んだ。従って、社会調査教育に使うには必ずしも最適なものではない。

そこで、このチューターを社会調査教育専用を作り替えることにした。そこでデータが問題であることに気づいた。社会学教育の一環として社会調査の授業を行う場合、その例題は全て現実の社会調査のデータであることが望ましい。だが、そのようなデータを集めることができなかった。理想的には、社会学理論を提示し、それから導出される仮説を示し、その検証のための社会調査のデータを例示できれば大変良い教育ができるだろう。しかし、一般に社会調査を行う研究者は、データはほとんど「使い捨て」しており、自分自身でさえもそれを再分析することは大変珍しい。第3者が利用することはさらにまれである。他の研究者の調査データを2次利用する形で教材にしたテキストなどどこにもなかった^(注1)。

多種多様な社会調査のデータを教育に使えば効果的であろうことは容易に予想できる。アメリ

カでは複数の社会調査データのデータバンクが存在し、研究者にデータの公開を行っていた。だが、当時は大型コンピュータを利用しており、データはIBM フォーマットのフルサイズの磁気テープで提供されていたから、手軽に扱える代物ではなかった。

ところが最近、札幌学院大学のデータベース^(注2)が部分的に利用可能になり、また、私の試みを知った何人かの研究者からデータの提供も受けられるようになった。授業に使える様々な社会調査データが手に入るようになったのである。しかしそれでも授業はうまくいかない。その理由をさらに考えてみた。

2.4 教育教材とマルチメディア

社会調査の授業に限らないのだが、授業を効果的に進めるには、関連する様々な資料、たとえば、地図、グラフ、ビデオ、数値データ、文献、新聞記事、音楽、録音テープ、アニメなどを授業でてぎわよく使うのが有効である。道具としては、伝統的な黒板のほか、スライド・プロジェクター、掛図、OHP、ビデオデッキ、カセットデッキ、パソコン、などがある。実際には、これらを授業に使うのは大変面倒である。準備に時間がかかるし、材料を集めるのも労力がかかる。最新の内容に入れ換えるのはなおさら大変である。

データ解析用のパソコン、解析用のソフト、調査データの3つがそろったとしても、直ちに社会調査の授業がうまくできるわけではない。授業全体をうまくこなすには、教材を授業の中でうまく使いこなさなければならない。パソコンとソフトとデータだけが教材ではない。上述のような様々な教材を用意し、それらを有機的に結び付けて授業に生かさなければならない。

色々な形態をした多数の教材を集め、それらを適宜、授業で使うのはかなり面倒なことである。整理し、管理するだけでも一仕事である。しかし、最新のマルチメディアの手法を用いれば、画像も音楽もグラフも音声も全て一つのソフトウェアに

統合することが可能である。管理もしやすくなる。ソフトウェアであれば追加，修正，削除も容易である。そこで1994年からそのようなソフトウェアの開発に取りかかった。

3. 「ティーチング・カルチャー」

これまで3年間の研究期間中，教材ソフト開発の様々な試みを行った。その過程で，最初に考えた仕組みでは，うまく行かないのではないかと考えるようになった。

今行っているのは，社会調査教育に用いる教材の開発，つまり教育の研究である。教育用の教材が使いやすく，役に立つものであるためには，その使われ方，授業のやり方を考慮に入れる必要がある。単にコンピュータの台数をそろえたり，ソフトを購入したり，マニュアルを分かりやすくすればすむというものではない。地図，グラフ，ビデオ，数値データ，文献，新聞記事，音楽，録音テープなどを用意すれば良いというものでもないだろう。それらをどのように使うかが問題である。

一般にモノは使われ方を指示ないし制約する。予定された使い方をしないと効果が得られない場合が多い。このことから考えると，「良い教材」を作れば良い授業を行うことは可能であろう。しかし，その前提として教材の開発者は授業では何がどのように行なわれるのかを知っていなければならない。たとえば，料理とは何をどうするのかを知らなくては良い包丁を作ることはできない。良い道具がなければ良い料理は作れない。

私がこれまで授業がうまくできないと悩んできたのは，社会調査の授業とは何をどうすべきなのかについて確信が持てなかったことに一因があると考えられる。この問題を「文化」^(注3)の問題として考察することが可能である。つまり，教材作成の前提として，大学の授業に関してどのような行為が適切であると当事者間で合意されているか，どのような期待と規範が形成されているか，を知

らなければならないのである。

当事者間で合意され，当然であり，自明であると信じられているような，物事のやり方や様式を社会学では「文化」と呼ぶ。大学での教育に関する文化を今，「ティーチング・カルチャー (Teaching Culture)」と呼ぶことにする^(注4)。「適切な大学教育の在り方」には社会の全構成員がかかわっているが，直接当事者は大学教員及び学生である。その意味でこのティーチング・カルチャーは教員と学生を主メンバーとする「下位文化」(Subculture; サブカルチャー)の一種である。このように考えることにより，この問題を，社会調査教育に限定されたものではなく，大学教育一般にあてはまるものとして扱うことができる。

下位文化，部分文化であっても，文化であるから，そこには適切と信じられているやりかた，様式，「作法」，が存在する。適切さを欠く行為には負のサンクション（制裁，罰）が加えられる。例えば，学生が授業には出席するのが当たり前で，そうするのが正しいことだから，欠席学生には単位を与えない。作法に合致した行為は当然と考えられ，この文化が独自に設定する基準を満たせば正のサンクション（報奨）が与えられる。例えば，きちんと試験勉強するのは良いことなので，よい得点をとった学生には「優」を与える。

おそらく，我々大学人が現在直面している問題，特に大学改革の問題は，この下位文化と全体文化とのずれが大きくなり過ぎたことが理由であろう。そもそもわが国には，「ティーチング・カルチャー」なるものは存在するのだろうか。ティーチング・カルチャーの問題とは，大学で授業をどのように行うべきかという問題である。私見では，わが国においては，大学での授業に関してはティーチング・カルチャーは全くないとはいわないまでも，未だ確立していない，あるいは日本全体が大変革期にあるために従来のカルチャーでは対応できないでいる状態だと思われる。つまり，どのような授業が適切かについて，教員，学生，職員を含む当事者間で，はっきりした合意が

成立していないのである。「学問の自由」を理由に、密室化した教室で教員は各自が好みのスタイルで好みの授業を行い、そのような慣行が次第に社会的に支持されなくなっている。

4. 教材作成のための暫定的指針

本研究の目的は教材作成であるが、それは同時に授業を成功させる方法を研究することである。教育に関して、次のような事柄に関する共通の理解、ないし合意が大学人の間に成立していると仮定して、教材設計にとりかかろうと思う。

- (1) 授業では教育を行う。
- (2) 教育の目標、スケジュール、成績評価の基準、出欠の扱いをあらかじめ提示する。
- (3) 課題について説明し、課題のやりかたについてもきちんと教えておく。
- (4) 学生が自力で読め、理解でき、予習復習可能なテキストを用意する。
- (5) 練習問題を用意し、学生に練習させ、解答し、評価する。
- (6) 良い成績が欲しい場合はどうすればよいか指示する。
- (7) 成績が悪い場合は指導をきちんと行う。
- (8) 不合格者に理由を知らせる。
- (9) 不正防止のポリシーをはっきりさせておく。

いずれも自明のことと思われるが、補足しておきたい。

4.1 授業では教育を行う

「教員が自己の学問を語る」というタイプの授業を行っている人はいるし、またそれが好ましいと考える人も少なくない。しかし、授業で教える教育内容は当該領域の専門家や学界で明示的、暗黙的に妥当と考えられる内容でなければならないだろう。それが各教員個人の「独自の学問」であっても構わないと思うが、誰も知らない特殊な、場合によっては、他の専門家から妥当ではないと

判断されるようなものは教育には好ましくない。新たな自説を論じる場合は、まず先に学会や研究会や論文でその内容を社会に公表し、批判や評価を受けた後に講義を行うべきである。ここでは主に文系の学部教育を念頭に考えているのだが、少なくともアンダーグラデュエイトには独善的な授業は行うべきでない。

また、学界で広く認められている、標準的な項目を教えている場合でも、学生の理解の程度を考慮しつつ授業を行うのであれば正しく教育を行っているとは言えないだろう。

4.2 教育の目標、スケジュール、成績評価の基準、出欠の扱いをあらかじめ提示する

これはシラバス作成の問題と関係がある。特に文系の一部の専門では意のおもむくままに自由に授業をやりたいという声も聞かれるが、そのような態度は、学生に大変不親切である。その授業の教育の目標と成績評価の基準は、具体的に示しておかねばならない。学生が科目選択の際に、これらの情報がなければ、適切な時間割を組むことができない。

他方、学生の側に選択の余地がほとんどない、固定的なカリキュラムで授業を行っている場合もある。その場合でも大学は教育内容を公表する責任があると考えられる。固定メニューでも、学生はこれから受ける授業の目的などについて知る権利があると思われるから、やはりシラバスなどの形で公表すべきだろう。出欠の扱いも事前に学生に伝えておくべきと考える。

4.3 課題について説明し、課題のやりかたについてもきちんと教えておく

大学では「課題」や「レポート」を学生に課することがよくあるが、その場合、たとえば、「レポート」とは何をどうするのか、学生にきちんと教えておかねばならない。一部の例外的な学生を除いて、レポートの書き方を学生は全く知らないといつて良いのが普通である。他方、レポートの書

き方をきっちり教わったこともなければ、自分で考えたこともない、という教員も少なくない。ある教員が考えるレポートの姿と別の教員が考える姿が一致しているかどうか分からない。だから、自分の授業の場合、レポートとは何をどうするのかははっきり教えておかねばならない。

4.4 学生が自力で読め、理解でき、予習復習可能なテキストを用意する

「学者たるもの、毎週、一週間頭を絞って考えて、その成果を大教室で、学生に向かって講義ノートを読み上げ、学生はそれを筆記する、講義ノートはそのまま出版できるほどレベルの高いものである」、このようなタイプの授業はかつての帝国大学の文系の大先生の授業によく見られたと聞いている。大学の授業であっても、それは学生にとっては学習の、教員にとっては教育の機会である。このような「古きよき時代」の授業やり方が今日では受け入れられないものであることは明らかである。

「テキストがある」ということは、授業の内容が出版できるほど普遍的で、広く受け入れられているものであることを意味するだろう。一般の日本人学生は外国語で大学教育用のテキストを読みこなせるほどの学力はないから、特別な理由や必然性がない限りテキストは日本語でなければならない。教員が読めるからといって、それを直ちに学生用のテキストにすべきではない。

テキストは必ずしも商業出版された書物である必要はなく、手作りでも構わないが、しっかりした造りで、なによりも内容が洗練され、整理され体系だったものでなければならないだろう。適切なテキストがない場合は当然ありうるが、アンダーグラデュエイト向けの授業では、そのような科目は、特に多人数で講義形式の授業の場合、テキストが入手できるまでは開設を差し控えるぐらいの配慮はあって然るべきだろう。

4.5 練習問題を用意し、学生に練習させ、解答し、

評価する

授業が教育であり、学習の場であり、最終的に学生を評価しなければならないのなら、練習問題を用意し、採点し、正解を示さなければならない。練習問題を用意したり、教育訓練を行うことが難しい科目もあるだろうが、評価する以上、学生には何らかの練習のチャンスを与えるべきである。

4.6 良い成績が欲しい場合はどうすればよいか指示する

点取り虫を作ろうというのではない。その授業の目的をはっきりさせ、それをどのように達成すれば教員として満足なのかを学生に知らせるべきだと考える。「〇〇学の××理論を理解したものに良い点を与える」といったあいまいな表現でなく、具体的に目標を設定すべきである。

4.7 成績が悪い場合の指導をきちんと行う

学生の中には成績が良くない者も出てくる。古い時代の教育を受けた年配者の中には、大学で勉強しなかったこと、授業が理解できなかったこと、成績が良くなかったことを半ば自慢する風潮も未だに見受けられる。これはあくまでも昔話と理解すべきで、今の時代には、成績の悪いものは、落ちこぼれかかっている者と理解すべきである。

シラバスなどが整備されているものと仮定すると、成績不良の原因は、学生の努力不足か、教員の教育の失敗かのどちらかであろう。学生は勉強するために入学してくるのだから、成績不良者は気の毒な存在である。能力的に授業についてゆくのが無理な学生には早めに進路変更を助言し、成績回復が可能な者には適切な教育指導を行わなければならない。

4.8 不合格者に理由を知らせる

不合格はむろん、試験のできが悪かったからなのだが、合否だけでなく、どこがどれほど足りなかったのかを知らされなければ、学習する側としてでは対策を立てられない。

4.9 不正防止のポリシーをはっきりさせておく

試験時のカンニングだけでなく、他人のレポートや参考書の丸写しによるレポート作成なども禁じるべきであり、ペナルティーは事前に徹底させておかねばならない。なお、このこととあわせて、欠席、レポート未提出、提出の遅れなどを評価にどのように反映させるかも事前に知らせておくべきだろう。

これらを、当然のことである、自明のことであると誰もが見なすような雰囲気があってはじめてまともな授業が成り立ち、工夫して作られた教材が役に立つチャンスが生まれる。そのような雰囲気があることがここで言うティーチング・カルチャーが成立している状態といえるだろう。

5. 改良型教材作成の基本方針

大学教育に関して、公開され教師の間で共同利用しうる教材は、テキストしかない、というのがほとんどの専門分野の実情だろう。一般に、テキストの使い方、授業のやり方は、教員の間で暗黙的に自明であると合意されている。市販されているテキストは、それだけで上手な授業を行えるようには作られていない。教材として不完全なテキストを手にした教員は、多すぎる学生数、狭い教室、換気設備の不備、学生の私語、暗い照明などに悩まされながら、多数の会議に出席し、多数の授業をこなす、研究業績を増やさねばならないなど、さまざまな制約条件のもとで、各自工夫して、経験とノウハウを積み重ねていかねばならない。上手な授業のやり方については各自が全く素人のレベルから自分で取得しなければならない。不完全な台本を与えられた新米俳優のようなものである。これでは効率が悪いし、教育の質の維持・確保も難しい。

このような状況を解決するには、ティーチング・カルチャーの洗練、発展及びその伝達を意図的に行う必要がある。それにはシラバスを含めた

教材、教授内容、教授方法、カリキュラムを共有化及び公開し、テキストを含む教育教材を共同開発し、それを共同で利用するという方法が良いと考える。本研究はそのささやかな試みである。

授業を効果的にすすめる、学生の学習を助けるための手段としては、テキスト以外にも様々なものが考えられる。ここでは、一定のティーチング・カルチャーを前提とし、教育を助ける手段として、様々な素材を取り込んだ改良型教材作成の基本方針を考えてみたい。

ある授業科目に関して、教育内容、使用テキスト、評価方法、授業方法などが教員の間でほぼ決まっているような専門分野もあるだろう。しかし他方で、授業内容が教員の自主決定に任されており、しかもカリキュラムに関して、そもそも同業者間で合意が成り立っているかどうか自体、検討されたことすらないという科目も少なくないのではないだろうか。以下では、社会調査の授業に関して、そのような合意が暗黙的になりたっていることを仮定して話を進めよう。

5.1 教師用マニュアルと学生用テキストを分ける

教員は、授業内容の全てに関して熟知しているとは限らない。特に若手は知識が不足しているし、それを補う教育経験も不十分である。逆に、ベテランの場合は、学界や世間の新しい話題から目をそむけがちである。ベテランは自分の行う教育に関して自信を持っているが、同時に独善的になりやすい。

テキストの構成上の工夫として、簡便な記述と詳しい記述を分けたり、注で専門的な解説を加える場合がある。専門向けの注釈を詳しくしすぎると、テキストが厚く、高価になり過ぎる。他方、学生テキストに授業方法の詳しいノウハウを記載するのは奇異である。教師用マニュアルと学生テキストは分けるべきであろう。

学生テキストは扱いやすさ、読みやすさ、それにコストなどを考慮すると、印刷された書物の形態がふさわしい。教師用マニュアルは市販出版物

である必要はない。少部数印刷になるから，DTP またはコンピュータソフトウェアであって差し支えない。そのほうが加除が容易で都合がよい。

5.2 教師用マニュアルと学生テキストの構成

教師用マニュアルには学生テキストの内容に沿った専門的な注釈，シラバスの見本，学生テキストにある練習問題の回答例，ティーチング・プラン，などを含める。コンピュータ・ソフトにする場合は階層構造を持ったハイパーテキストが好ましい。具体的な授業計画は各自が立てるのだが，その見本を用意するとともに，必要な場合に利用できるように，試験問題や課題（レポート問題）の例と，回答例，採点基準の例も用意したい。

レポートを採点，添削して返却するかどうかは教員の判断によるが，教育的見地からすれば，添削，返却しないレポートは意味がないと考えられる。特に最終試験でない場合は，学力向上の手段としてレポートを積極的に利用すべきである。

学生テキストは，わかりやすい記述で，しかも読んで内容が理解できるように書かれているべきである。理解度を確かめることのできる練習問題や例題を備え，学生が興味を持った内容に関する参考文献も記載されているのが望ましい。

5.3 マルチメディア化

資料として統計データ，映像，写真，音声，グラフ，画像，イラスト，アニメ，などは学生の理解を助けるのに役立つので，コストとの関係を考慮しつつ，学生テキストに入れられるものは入れる。教師用のハイパーテキストには，マルチメディア機能を活用し，できるかぎりそれらを補助教材として取り込む。

授業場面，どんな機材が利用可能かに応じて，学生一人一台の環境でパソコン実習が可能な教材，ビデオプロジェクター用の教材，OHP用の教材，プリント配布物用の教材などを用意し，教師用マニュアルから出力できるようにする。全ての教材が学生の個人所有である必要はない。全員で

プロジェクター画像を見た方が教育効果のあがるものも多いだろう。

教師用マニュアルは，任意に新しい内容を付け加える，誤りを訂正する，古い内容を削除するなどの操作を各教員が自由に容易にできるような仕組みにする。

6. おわりに

我々は以上のような構想に基づいてプロトタイプの開発を行った。ティーチング・カルチャーの内容を自明と考え，自分で工夫して理想的な授業を組み立て，成功している教員も少なくないであろう。本稿で問題と考えているのは，大学教員という職業が教育の質を維持し，それを向上させる仕組みを確固たる制度として備えていないことである。教育の質の問題を考えれば，教材の確保以外にも，大学間，教員間での教育の質のばらつきや教育内容，教育方法が妥当かどうか，といった問題もさけて通れないが，ここでは主として教材開発についての我々の基本的な考え方を述べた（宇田川 1997）。

注

1. 最近になって，公開データを用いた優れた社会学，政治学，社会心理学系統の授業に使えるテキストが発表された。

(1) Greg Lee Carter (1995), *Analysing Social Issues - A Work Book with Student CHIP Software* -. Allyn & Bacon

(2) Earl Babbie, Fred Halley (1995), *Adventures in Social Research - Data Analysis Using SPSS* -. Pine Forge Press

この2冊の特徴は，いずれも，公開されているデータベースのデータを統計解析プログラムを用いて直接に参照しつつ，自殺，妊娠中絶，宗教などの社会問題をそれぞれ適用可能な社会学理論との関係で学生が分析できるように指導しているこ

とである。Earl Babbie の本は SPSS の利用を前提にコマンド集とデータを，Carter の本は解析プログラムとデータを，それぞれフロッピーディスクで提供している。ページ数は各 250 ～ 300 ページ程度で，関連する専攻の学生であれば十分理解できるレベルで書かれている。

2. このデータベースの名称は SORD (Social Opinion and Research Database) という。作成は札幌学院大学のメンバーを中心とする社会意識・調査データベース研究会である。新國三千代，小内純子，田中一 (Mar. 1995)，「社会・意識調査データベースの作成」事業報告，社会情報，札幌学院大学社会情報学部，pp. 211-214, Vol.4, No. 2. を参照されたい。

3. 文化とは「当該集団のメンバーの間で共有されている思考，信念，理解，感情などの様式」と説明される。つまり，大学の構成員である学生，教員，及び職員が大学の授業では何がどのように行われるのかに関して共通の信念を持っている必要がある。そして大学の授業が上記のような内容で行なわれるべきだとの合意が成り立っている場合，使いやすい教材の開発も可能になる。上記の文化の定義は，ブルーム，セルズニック & ブルーム著，今田高俊 監訳 (1991 (1987))，『社会学』，ハーベスト社，p.35 による。

4. ティーチング・カルチャーという概念は，S. R. Sharkey の言う「アセスメント・カルチャー」にヒントを受けた。

Stephen R. Sharkey (1992), "Assessment as A conversation about Teaching," p. 29, *Assessing Undergraduate Learning in Sociology*. ASA Teaching Resources Center

参考文献

- 田中義久 (1995)，『社会学教育の実態と動向等に関する調査』(平成6年度科学研究費補助金(総合研究A) (05301024))，法政大学
- 日本電気株式会社 (1991)，『ACOS ソフトウェアデータ解析システムDAISY事例集 DXT61-3』，214
- 宇田川拓雄編著 (1992)，『統計データ解析チューターシステムの開発』(平成4年度文部省科学研究費補助金(試験研究B) 研究成果報告書 (01810003))，北海道教育大学
- 宇田川拓雄編著 (1997)，『社会調査データを社会学教育に効果的に利用するためのハイパーテキストの開発』(平成8年度科学研究費補助金(基盤研究A) 研究成果報告書)，北海道教育大学